

102×2 ～ハラハラハラハラスメ ント～

高菜わさび

ハラメント

「明日、うちの会社倒産しちゃうかもよ」

ハラハラ

「えっ、これデバックないんですか？」

ハラハラ

あなたをハラハラさせるそれ、ハラハラハラハラメントじゃありませんか？気になった方は、お近くの豆腐局にご相談ください。

ふと、目が覚めた。

暑い夜のことだった。眠れないなと思った、そしてふと目を開けたら、自分の上に何かが乗っていることに気がついた。

「その瞬間？」

もちろん恐怖で、汗がね、びっちり出た。だってさ、俺を田楽にするために、誰かが重石を置いたわけだから、そりゃあ怖かったね。

でも、おかげで美味しい田楽になれたから、いいっていえばいいんだけどもさ。

ジグソーパズルをしている人。

「何のパズル？」

「豆腐！」

木綿豆腐140ピース。

「みんな白いな」

「そうだね～(^^)」

パチパチとピースを置いていく。

「楽しい？」

「もちろん！」

それじゃあ、始めて！

「はい、静かに今日は豆腐のツボに、鍼を打つ練習をします」

目の前には実習用の冷や奴、まずは冷や奴のツボを探ること、取穴（しゅけつ）をします。

「はい、ここが腰痛のツボです、腰痛を患っている豆腐はここが堅くなっている事が多いです」

まずは指で確認してみてください。

「それから鍼を打ってみてください、質問がある人は受け付けるから、それじゃ、始めて～」

ワイパーDX

「今日の商品はこちら！」

「冷や奴を食べようと思ったんだけど、水がきちんと切れなくて」

そんなあなたにはこちらをどうぞ、冷や奴に最適の豆腐ワイパーDXです。

「これをこうやって、お皿につけていただくと」

ウィンウィン

「すごいワイパーが動いて、どんどん冷や奴の水分が切れていく」

「あなたも今日から、これで水分がきっちり切れた冷や奴が食べれますよ！」

ご注文はこちらまで、ただいまから30分以内のお申し込みで、豆腐の賽の目切りが簡単に出来るプラスチックの型抜きもお付けします。

「食料支援」

「教育問題」

「エコロジー」

「世界征服」

豆腐は社会のために始めています。

「旦那様がお亡くなりになりました」

「ああ...」

「奥様、お気を確かに！」

ふらめく奥様を支えるメイド。

「現場にはご主人の頭にぶつかったと思われる豆腐の残骸がありました」

「私が昨日の朝、最後に主人と会った時に、口論になりましたの...豆腐の角に頭をぶつけて死ねばいいのになって...そんなことを思わなければ良かった」

「そんなことが...しかし、これは事故ではなく、他殺の可能性がります。旦那さんは撲殺ではなく、窒息死でしたから」

「なんですって！」

大きな体をしていながら、性格はとてもマメ、『今なお残る旧家の薫り、華やかな裏で、密かに蘇る殺意とは、大きな体にマメな性格、大豆警部がその謎を解く』

豆腐の約九割が、人に食べられることを志望し、残りは自分探しの旅に出る。
ほとんどの豆腐は鼻歌が上手い、音痴は一万丁に一丁。

「こりゃあ、大スcoopだ」

突然米と大豆による共同の記者会見が行われることになった。

米「世間では仲が悪いとされている私達ですが」

豆「猛暑によって体調を崩す方々を前にして、無用な諍いはやめて、栄養的に協力することにしました」

米と大豆を一緒に食事を取ることによって、人間に必要な必須アミノ酸を効率良く取れると言うこと、そしてそれを取るによって、猛暑の健康を維持できることを約一時間、説明をした。

「それではお二方共、記念撮影をしますので、握手したまま、こちらを向いていただけますか？」

次の日、一面を米と大豆が笑顔の写真が飾った。

「なんで、私が大豆の国の揉め事を何とかしなきゃいけないのよ！」

「これはフーコにしか出来ないことなんだ！」

突然フーコの元に木綿豆腐が現れた。

「フーコ、君に魔法の力を上げるよ」

そうやって魔法の力で変身したフーコ。

「じゃあ、行こう」

「どこへ？」

「大豆の国、味噌と醤油の喧嘩を止めなくちゃ、そうしないと世界が大変な事になる」

踊り狂うネギを大豆の力で止め

たり、生姜の元にお豆腐を届けたり。 パープー

ラッパの音で、パートナーの木綿豆腐のメックンを巨大化する。

「まだ絹ごし豆腐なら良かったのに！」

「木綿には木綿の良さがあるっていうの！これだから女子は！」

二人とも...どうか、豆腐と魔法の力で、大豆の国を救ってください...

クールビズ

「ええっと、社長から、この夏の節電対策と、クールビズについてのお知らせがあります」

「この猛暑を乗り切るために、三時のオヤツにお菓子類を禁止して、冷や奴にすることにします」

社員とパート、アルバイトからは文句は出たが、その夏、この会社から熱中症の人間が出ることはなかったという。

いつもの豆腐

いつもの豆腐がネギを乗せてた。

「お前...」

「なんだよ」

「彼女出来たか？」

「な...何言ってるんだよ、そんなわけないじゃん」

しどろもどろ。

「ふ～んそうなんだ、けどさ、お前の頭のネギ、この辺りじゃ売ってないネギだな」

「冷や奴なら、九条ネギぐらい当然だろう！」

「へえ～わざわざ九条ネギにしたんだ！」

「これからデートなんだ、ネギぐらい乗せなきゃ格好悪いじゃん」

「その子、可愛いの？」

「うん」

「白いの？」

「とっても！」

「まあ、上手くやれよ」

「...ありがとう」

一週間後...

(上手く行かなかったか)

いつもの豆腐が泣きすぎて、もうちょっとで高野豆腐になりかけていた。

噛み傷

「バカやろー！」

料理長が豆腐を調理しようとした若者をぶん殴った。

「お前が、豆腐を調理するのはまだ早え！」

たくさんの豆腐を水の中にさらします、そして最後まで生き残った豆腐だけを料亭高島田では使います。

「見ろ！」

たくさんの豆腐の中から、生き残った豆腐は大変気性が荒く、並の板前では調理できないほどとなり。

「包丁に噛み傷が！」

「これが豆腐の怖さなんだ」

「やってくれ！」

「いいんですか？」

「ああ、構わない」

ぎゅっと目をつぶり、覚悟を決めた豆腐は、すり鉢の上から飛び降りた。彼はこれからとある事に、身も心も捧げようと思っていた。

「あっ、いい匂いがする」

豆腐はその身をすりつぶし、蓮根と混ざった。もはやその形は豆腐だとは思えない。

その姿のまま炙られ、秘伝のタレが塗られた。

とあるウナギ屋の賄いとして買われた豆腐は、価格高騰で店が立ち行かなくなるのを間近で見たために、何とかしたいと思った。

「へえ～こういうのもありだね」

豆腐は精進料理のウナギとなり、客に提供されることになった、お客様からの評判は上々、店に客足は戻ったが。

「でも、...豆腐さんはもういないんだな」

ポツリと初老の店主が言うと、長いこと連れ添った奥さんが、隣で涙がこみ上げてきた。

ノベルティを作ってみたと、豆腐が言うので。

ボールペンを試してみた。

頭にプラスチックの豆腐がついているせいか。

「これボツ」

「どうして！」

「豆腐の角が、指にささる」

一回、一回イライラするぐらい、指にささった。

「そこをなんとか！」

「ボツ！」

豆腐はシュンとして、自分の席に戻っていった。